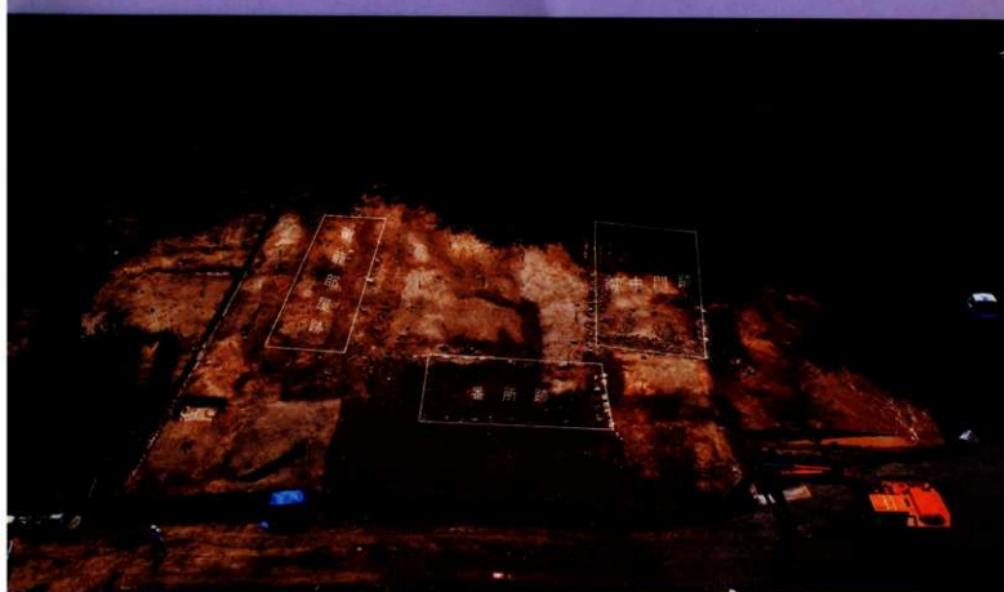


雪国の中京都 いいやま

飯山城跡

—南中門・番所・駕籠部屋跡発掘調査報告書—



1994・2

長野県飯山市・飯山市教育委員会

刊行にあたって

飯山市長 小山邦武

飯山市は長野県の北端に位置し、豊かな自然と貴重な文化財に恵まれた地域であります。古くは上杉謙信方に属し、その後飯山藩の城下町として発展してきました。現在でも西山麓に正受庵をはじめ数多くの寺社が建ち並び、最近では『寺町いいやま』として観光に訪れる人も多くなっています。

そして、この城下町いいやまのシンボルとして長野県史跡の飯山城跡があります。飯山城は、永禄7(1564)年ころ上杉謙信が本格的に築城したと推定されています。そして近世には間・皆川・堀・松平・水井・青山の各氏が居城し、享保2(1717)年以降は本多氏が幕末まで城主を世襲しています。明治以降、建物の解体や開闢などによって飯山城も石垣などを残すのみとなりましたが、典型的な平山城であるために市街地化せず、現在でもほぼ当時の規模を残しています。

平成4年、飯山城跡の西端部に飯山市弓道場の建設を実施することになり、事前の発掘調査を実施しました。調査の結果南中門跡をはじめとする建物跡が発見され、飯山城の一部を明らかにすることができました。市ではこの貴重な遺構を後世に残したいと考え、弓道場を設計変更するとともに南中門跡を盛り土保存し、その上に同規模の復元展示を行なって市民の皆様が見学できるよう配慮しました。

今後ともこの飯山城跡を市の貴重な文化遺産として大切に保護したいと考えています。本報告書がそうした飯山城に関するガイドブックとしても活用いただければ幸いです。

平成6年1月14日

はじめに

1. 本書は、飯山市弓道場建設にともなって緊急発掘調査を実施した飯山城南中門跡ほかの調査報告書です。
2. 発掘調査は、平成4年6月12日～同年8月12日まで実施し、同9月1日まで保存作業を行いました。また、保存が決定した南中門については、一般に公開できるように平成5年7月21日～23日の3日間復元展示作業を実施しました。
3. 発掘調査は、団長に高橋桂飯山北高等学校教諭を委嘱し、市教育委員会が実施しました。
4. 発掘調査の参加者は以下のとおりです（順不同・敬称略）。

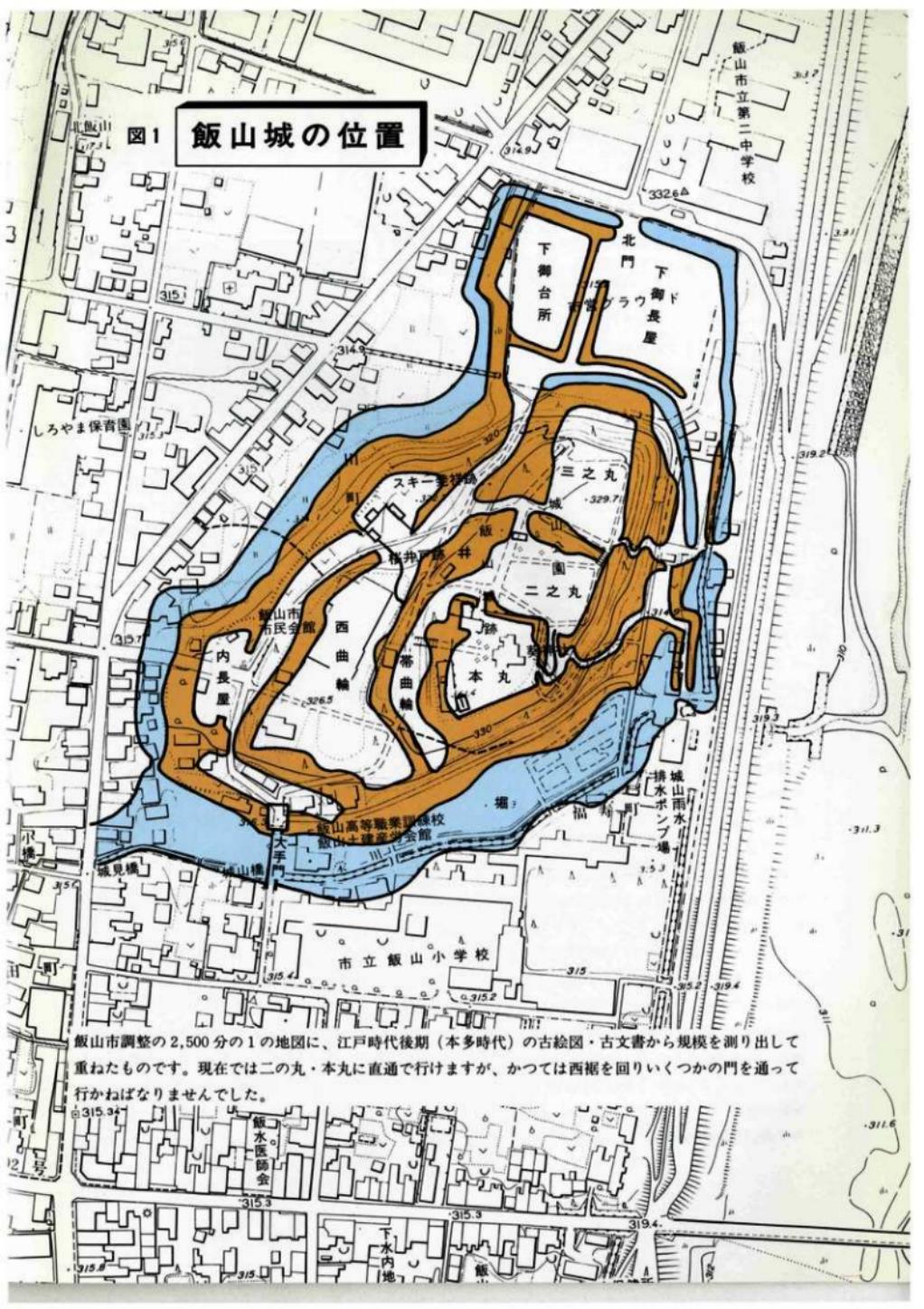
担当 望月静雄（市教育委員会事務局） 調査員 小林新治 田村滉城 常盤井智行 桃井伊都子
作業員 木村忠夫 常田利夫 丸山三二 達家わかの 土屋久栄 植中昌子 市村ますみ 村松修司
千野清美 足立次子 土屋ちよ 高橋チズル 猪瀬光治 清水国治 斎沢明治 清水三名 丸山十四
高柳節江 岸田昇 羽田タツ子

5. 発掘調査から報告書作成についてご指導いただいた方々は以下のとおりです（順不同・敬称略）。
吉澤正己（信濃建築史研究所） 伊藤友久（県埋蔵文化財センター） 小池幸夫（県文化課）
飯山市文化財保護審議会 飯山市役所都市計画課（課長松本広四 課長補佐渡辺吉宗 係 江尻英生
村山富士夫 清水朋美） 飯山市誌編纂室
6. 本書は、飯山市教育委員会事務局が執筆・編集しました。文責は望月にあります。

教育長 岩崎彌
教育次長 月岡久幸
社会教育係長 今清水豊治 同係 大口なおみ

7. 今回の調査で用いた「飯山城跡」の略号は、「I Y J」で、遺物・図面等にはすべて略号で記してあります。
遺物・図面は、飯山市教育委員会で保管しています。

図1 飯山城の位置



飯山市調整の2,500分の1の地図に、江戸時代後期（本多時代）の古絵図・古文書から規模を測り出して重ねたものです。現在では二の丸・本丸に直通で行けますが、かつては西堀を回りいくつかの門を通って行かねばなりませんでした。

飯山城の概要

1. 築城430年の歴史

明治4年(1971)の廃藩置県にともない、日本各地で城が解体されました。飯山城も、門や櫓・御殿などの建築物のうち一部は焼失しましたが多くは解体され、そのうち門など的一部は払い下げられて移築されました。したがって、往時の様相を伺わせるような遺構は石垣のほかなく、現在では城山公園として桜の名所となっています。

飯山城は、永禄7年(1564)頃に越後の上杉謙信が信濃一円に勢力を伸ばしてきた甲斐の武田信玄に対抗して、越後の防衛・信濃経営の前線基地として本格的に築城したといわれています。それ以前からも「飯山の城」として泉氏の居城でありましたが、古文書に永禄7年10月1日大改修の結果を謙信自らが検分したとあり、これによりほぼ現在の飯山城の規模となりましたので、この日を「飯山城築城の日」としています。その後、天正11年(1583)上杉景勝の支配になって、飯山城留守役であった岩井備中守信龍に命じ飯山城の改修と初めて城下町づくりが行われました。したがって、飯山の城下町は410年の歴史をもつていています。そして、飯山城は今年でちょうど430年の歴史となりました。

飯山城の特徴は、自然の地形を巧みに利用した平山城と呼ばれる構造で、三の丸・二の丸・本丸が階段式(梯郭式)に配置されているところにあります。これは「後ろ堅固の城」と呼ばれる典型的なもので、堀や石垣などとともに「名城」と呼ばれるゆえんでもあります。

2. 古絵図に見る飯山城

飯山城内の建造物は、残された古文書や絵図などによってその存在は知られていましたが、建物の名称や規模などについては不明の部分が多くありました。しかし、飯山市誌編纂の資料収集の中で、飯山城に関する「御城内観留」や「城絵図」、「建物の図面」などが新たに発掘され、城内的一部分がより明らかとなっていました。

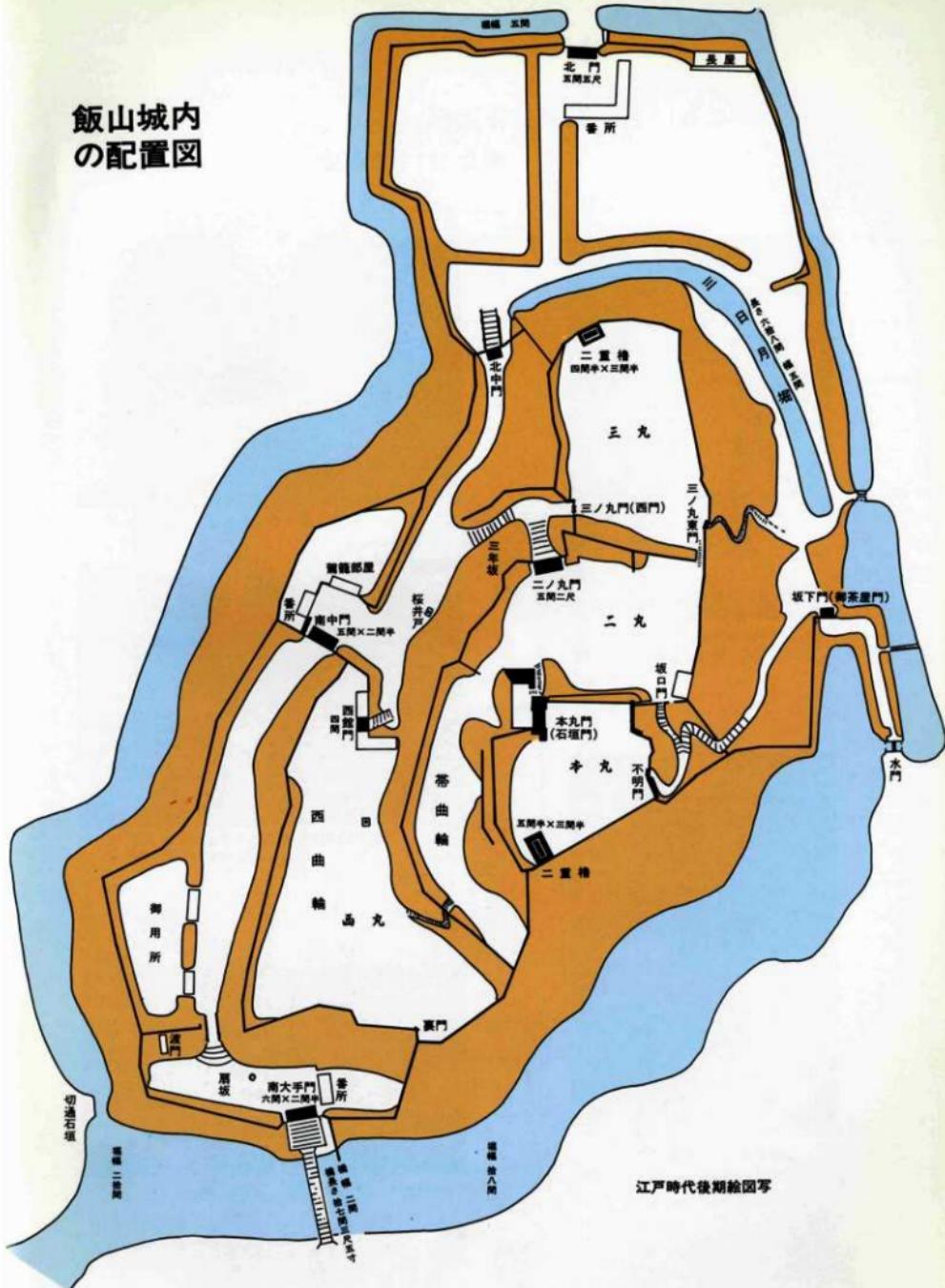
城内の建造物は、築城以来藩主の交代や、火災・地震などの災害によってその時に取り壊されたり、新築・改修されるなどによって長い年月の間に移り変っています。城絵図を見ても時代によって建造物に変化が伺えます。

右図と6ページの絵図は、江戸時代後期(本多氏時代)の写しです。これには、その時代の場所の名称や規模などが記載されていて、城内の様子が良くわかります。これらの絵図から推定すると、この時代には、門が南大手門をはじめ13あり、櫓は本丸と三の丸に各1棟あります。このうち二層門は南大手門・南中門・二之丸門・本丸門・北大手門の5棟あり、櫓は2棟とも二重櫓がありました。また、重要な場所には必ず番所が設置されていたり、武器蔵・糧蔵なども建てられています。坂には扇坂・三年坂などの名称がつけられていることもわかりました。なお、藩の御殿は二之丸にあり、御会所・御證所などは西曲輪(現市民会館付近)にあったようです。また、藩主(本多氏)の住まいも西曲輪にあったことが、改修に伴う棟札や平面図などから明らかになっています。



西側より飯山城を望む

飯山城内の配置図

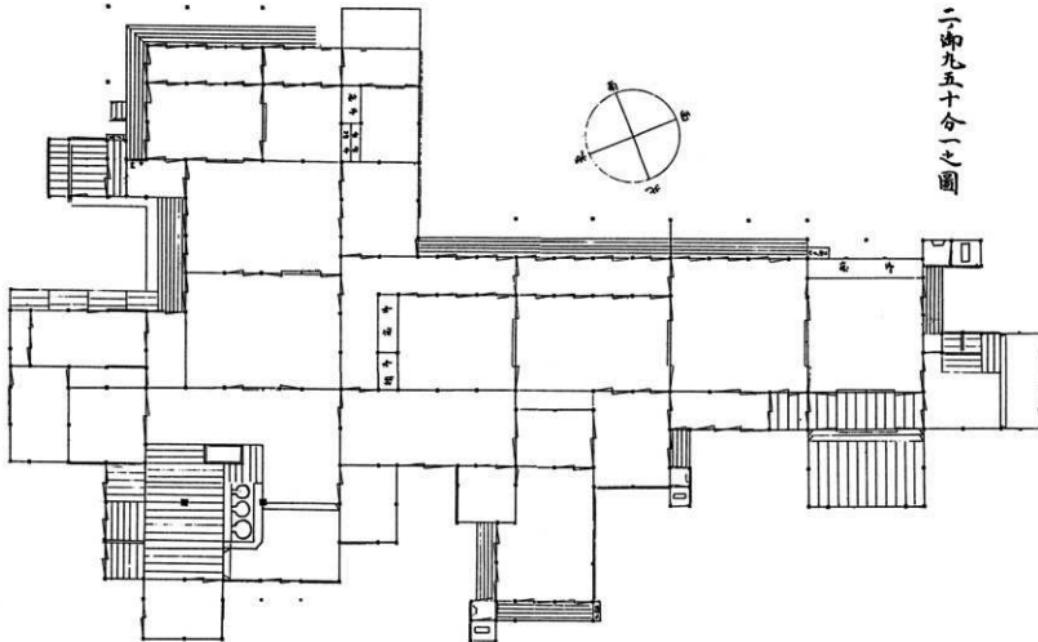


江戸時代後期絵図写

これが二ノ丸御殿の平面図！

建坪は二百四坪

二ノ丸御殿之圖



市役所に保存されていたもので、今回初めて公表される平面図です。二ノ丸御殿とは藩主の公邸で、この建物の中で公務が行なわれていました。図は $\frac{1}{200}$ の原図を $\frac{1}{500}$ に縮小したもので、東西約45m、南北28mの大きな建物です。建坪は、古文書では204坪、実測で663m²でした。

写真で見る飯山城の現況



二の丸の公園化と今に残る石垣



泉氏の伝説をもつ桜井戸跡に建立された「桜井戸遺跡」の碑(昭和7年建立)



明治16年に建てられた本多氏中興の祖
本多広孝を祭神とする葵神社(本丸)



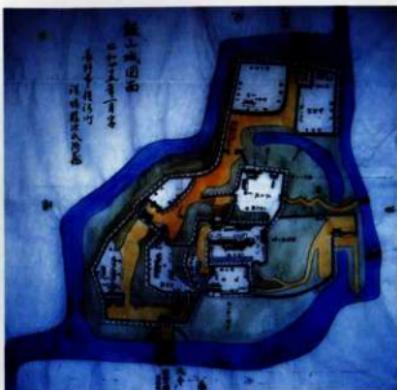
本丸葵神社に登る石段
(かつては石垣で通路はなかった)



七賢人の碑(昭和41年建立)

建物が記された唯一の絵図写

多くの古絵図がある中で、建物はまず記載されてはおらず、門や橋・堀・石垣・塙などが書かれているだけです。これは、御殿などの建物は幕府に届け出る必要がなかったため、記入されることが少なかったと思われます。この絵図は、長野市深堀氏所蔵絵図の写しです。二の丸御殿は4ページの平面図から想定される上屋構造のとおりで、比較的写実的に描かれたことが良くわかります。



発掘で明らかにされた飯山城

1. 弓道場建設のための発掘

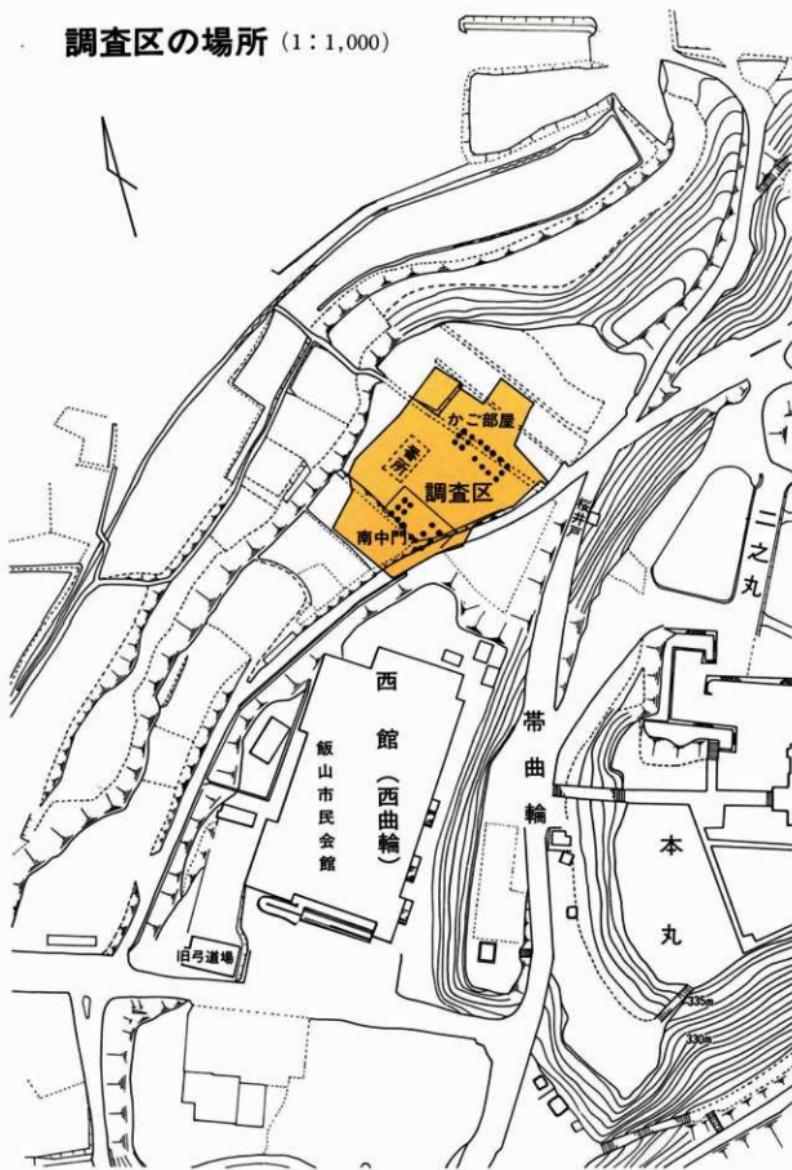
平成4年6月、弓道場建設のため事前の記録保存の調査を実施することになり、約2,000m²が対象となりました。発掘した場所は大字飯山字田町2,748-1番地ほかです。

田町の交差点から飯山城跡へ上りはじめると、現在の武道館の北側にいわゆる七賢人（寺田裕之・坂本飼致・島津忠貞・武田義盛・小山藏元・小山進・佐久間義基）の碑があります。この場所は市民会館へ訪れる人の市営の駐車場となっています（平成5年10月現在 城門復元のため工事実施中）。そして、そのさらに北側はかつて民家があり、桜井戸や三の丸に向かっては畠となっていました。ここが調査地で、長野県スキー発祥の地としても知られています。古絵図では、松平時代（元禄～宝永・1700年頃）にすでに門や番所、駕籠部屋などが記載されており、幕末の本多候時代の絵図でも同様に記されています。それ以前の松平時代初期の飯山城最古の絵図と思われる正保（1645年頃）の絵図面には門のみが書かれています。ただし、この絵図面には門以外の建物は記されていませんので、番所や駕籠部屋がいつ建てられたかはっきりしません。

さて、中世の飯山城は北が大手（正門）でありましたが、江戸時代に入って間もなく南が大手門になったものと考えられています。現在の飯山小学校の西側から栄川（濠）を渡り、南大手門をくぐりすぐに西に向かって現在の武道館の場所に outs。さらに、市民会館の西側を北に向かって南中門（現在の弓道場付近）を通って桜井戸の前に outs。三の丸の登り口で北からの道と合流し三の丸へ続きます。そして二の丸から本丸へと上って行くのです。

南大手から入って本丸に向かう二番目の門がこの場所にあったということで、これを本多時代には南中門とよんでいたようですが、古文書には中御門などと書かれているものもあります。

調査区の場所 (1:1,000)



2. 調査の経過

発掘調査は、平成4年（1992）6月12日から同年8月12日まで行われました。これは、当該地域に弓道場の建設を計画したため、事前に発掘調査を実施して当時の痕跡を記録に残そうとするものでありました。当初は明治以降の開墾や解体などによって城の遺構はほとんど残されていないだろうと判断していました。しかし、調査を進めていくうちに石碑などと呼ばれる建物の基礎が残っていることがわかり、残されている古文書や古絵図などに記されている南中門・番所・駕籠（乗物）部屋と配置や規模がほぼ一致することが判明しました。

市内外で反響が大きくなった7月26日には、市民一般公開として現地説明会を実施しました。午前・午後の二回に分けて行いましたが、総勢200名の参加者がおり飯山市のシンボルである飯山城の関心の高さがあらためてうかがえました。また、遠くは長野市・須坂市からも見学者がありました。

市では貴重な遺構が発見されたことから、弓道場の設計変更を行い遺構を後世に保存することに決定しました。こうした保存のための記録作業や砂などの土盛り工事を9月初旬まで実施して全作業を終了しました。

なお、保存された遺構のうち南中門跡については、盛土した上に礎石などを模型で復元展示し、一般の方々に実際に目で見ていただけるように計画し、復元工事を平成5年7月に行いました。

ここで、信濃建築史研究室の吉澤正己氏や飯山市誌編纂室の古文書調査で明らかになった南中門・番所・かご部屋の資料を次に掲げておきます。

（史料）

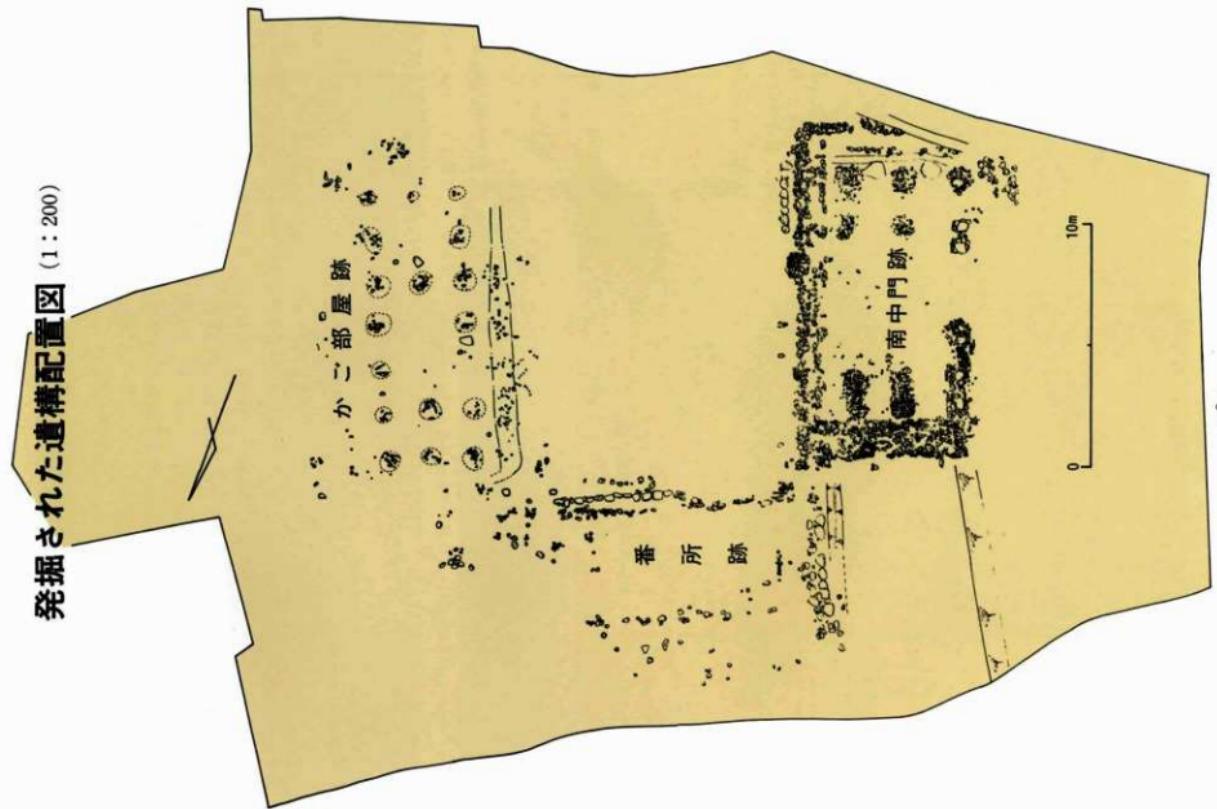
- A 元文4年 御城内建坪書上帳（弘化4年写）
- B 文化9年 御城内覚留（弘化4年写）
- C 弘化4年 飯山城絵図（地震破損箇所上）

	A	B	C	備 考
南 中 門	30.3坪	5間 袖西1間1尺 東1間4尺	櫓門形式 潟れ	二層門
番 所	19.5坪	_____	_____	_____
駕籠部屋 （乗物）	16.5坪	_____	_____	_____



飯山城跡発掘調査（手前が南中門、左に番所、奥にかご部屋跡が現れる）

発掘された遺構配置図 (1:200)



3. 明らかになった飯山城の遺構

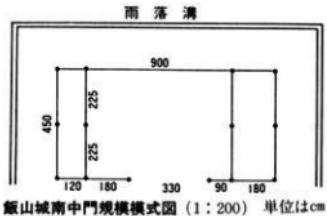
イ 南中門跡 (みなみなかもんあと)

南大手門より帶曲輪を上って二番目にぐる門が南中門です。古文書から、「間口五間・下坪 30.3 ただし雨落共」などがデーターとしてわかっていました。

場所は畠地で、約 120 cm の段差がありました。この段の部分から南中門の構造物が発見されています。古絵図に示された場所と一致しますし、遺構の状況からも南中門跡と断定することができます。南側の一部が水道管の敷設によって破壊されていますが、ほぼ長方形に溝がめぐっています。雨落ちの溝と考えられます。建物は溝に囲まれた内部で、細かな石が集合した場所がいくつかあります（下図で示した P）。これは、「割栗石」とよばれるもので、礎石を置くための基礎です。したがってこれらの上に礎石があったと考えられます。また、割栗石はそれぞれ規則正しく配列されていますので、発見されたものは時期的に前後関係はあったとしても、規模自体は相違せず一軒の建物の規模を想定することができます。その模式図を示したのが右の図です。

なお、向かって右側に大きな礎石が 2 点発見されています。下部には割栗石もなく、単に地山を掘りくぼめて据えたものです。以前の建物基礎かもしれません。

古文書通り、間口 5 間、奥行き 2 間半、下坪約 30坪でした。





南中門跡全景



◀西南隅より



東北隅より ▶

口番所跡 (はんしょあと)

南中門に接した左側に位置しています。遺構はあまり明確ではありませんが、石列が一部において確認されています。この石列は外側に向かって面を描えていますので、建築材を乗せた石だと考えられます。

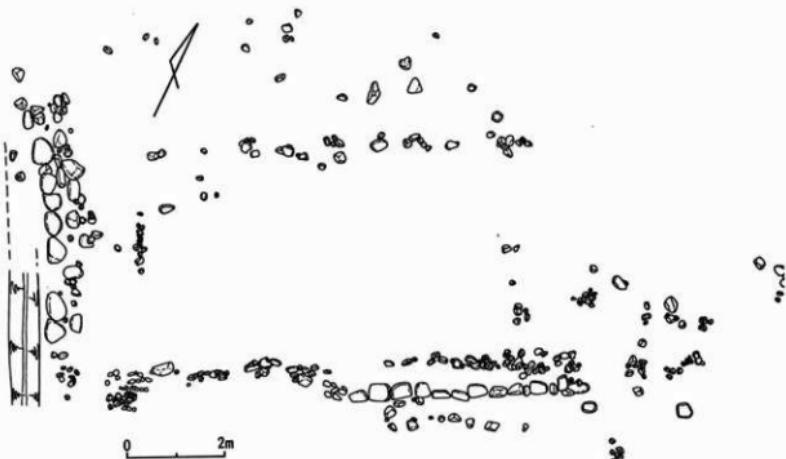
建物と推定される中には焼土をともなった浅い土坑が二か所見つかり、さらに建物西外側にはゴミ捨て場と思われる遺物が集中して発見される場所もありました。



番所全景 (溝は調査のための坑)



石列 (西より)

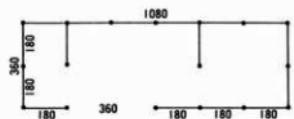


番所跡平面実測図 (1:100)

ハ 駕籠部屋（かごべや）

南中門をくぐった正面に位置しています。小石のまとまった割栗石が発見されたので、建物の規模も判明しました。間口6間（約11m）、奥行き2間（約3.6m）で、柱間隔は1.6~2.0mです。建物面積は約40m²（12坪）で、古文書には雨落ち面積も入れて16.5坪（約54.5m²）とありますので、残り4.5坪が雨落ち部分と考えられます。調査ではこの雨落ち部分をはっきりすることができませんでした。

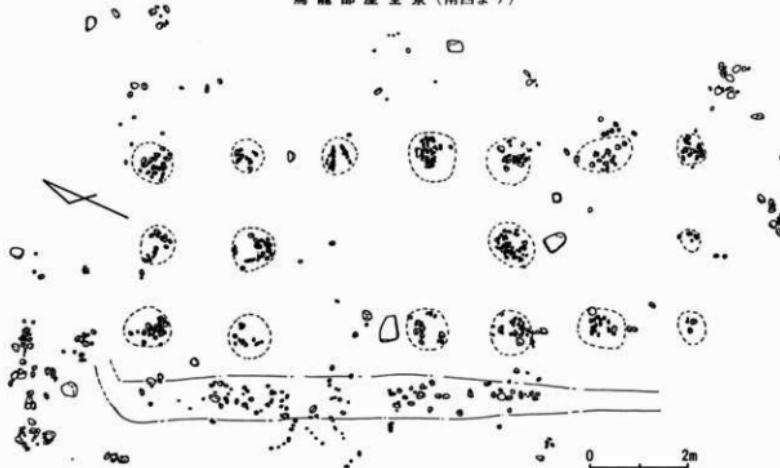
建物の構造は柱の配置から考えると入口が二間（約3.6m）と広く、入ってすぐに土間と思われる約12m²の広間があり、向かって左側には柱によって遮られた約6.5m²（4疊）の高床の部屋があったと推定されます。また、右側には、約13m²（8疊）の部屋があったと推定されます。



かご部屋規模模式図 (1:200) 単位はcm



駕籠部屋全景（南西より）



駕籠部屋跡平面実測図 (1:100)

城内くらしの道具

調査区から発見されたからすべて城主や武士たちの所持品であったとは言えませんが、当時の城内の暮らしぶりがほんとうに現れる品々が発見されました。当時使用されたものの多くは、城主をはじめとする武士によって持ち去られ、その一部は現在でも伝世品として大切に残されていると思われます。しかし、茶わん類などの破損したものなどは拾てられて100年以上もの間土の中に埋もれていたものが今回発見されました。

食

飯碗

飯碗と考えられる碗は、一般的に江戸時代中期以後その量が圧倒的に増えます。後期になると、現代の碗に近い形態のものが登場するようになります。

写真1～3は19世紀の瀬戸・美濃の磁器で、3は広東碗と呼ばれているものです。



飯 碗



皿



茶 碗



蓋

江戸時代の一服（茶碗）

江戸中期～後期になると抹茶を嗜好していたのが、薄茶・煎茶を愛飲するようになり、丸碗(12)や天目茶碗から高麗茶碗を模した碗となります。さらに後期には、湯飲み程の小振りの碗が大量に出回るようになります。これらは、少量の煎汁を嗜む煎茶の普及が背景にあると考えられています。

飯山城で出土した茶碗はこの頃のもので、1820年ころから近代にかけて生産された瀬戸・美濃製品です。なお15は宣徳年製と銘があり17世紀後半に造られた肥前製です。なお、こうした碗は、蓋（さかづき）として用いられたようでもあります。

また、蓋物・急須などの蓋も見つかっています（16～18）。



片口鉢・土鍋・すり鉢

台所容器

番所には厨房施設があったためか、日常生活雑器が発見されています。片口鉢(19)や土鍋(20)、すり鉢(21)などがあります。土鍋は美濃製品、すり鉢は備前製と思われます。

江戸時代の酒

江戸の後期には磁器の「盃」が用いられるようになつたと古文書には記されています。現在のような規指と人差し指でつまむ一口サイズのいわゆる「お猪口」はあまり発見されず、テレビドラマとは違い小型の湯飲み碗が多く用いられたようです。

飯山城ではお猪口が2点(22・23)発見されています。22は、内面に「忍久」とかかれていますが、「久」の下に文字が認められますのであるいは「忍冬」(すいかずら)を意味しようとしたものかもしれません。また、燐徳利(24)は、幕末に入って多数出土するとのことで、「燐徳利に猪口でちびり」は比較的新しいスタイルのようです。



猪口と燐徳利

住

燈火具

燈火具は一般的に素焼きの土器製が圧倒的に多く、城内でもその傾向があります。その多くは、灯芯から滴る油を受けるために二枚の小皿を重ねて用いる燈明皿です(25~27)。江戸中期以降になると受け部がついた燈明皿になり(28・29)、陶器製のものも現れます(28)。

植木鉢

江戸後期には、さまざまな産地の陶器製品が現れるようですが、飯山城では備前系すり鉢の底に穴を開けて植木鉢にしたもののが一点発見されました(31)。

化粧道具

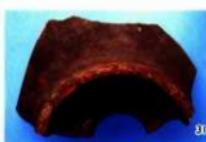
紅は一般には「紅皿」に入れたものですが、小盃を利用したものが一点出土しています(32)。

鳩笛

土笛をなめると子供の虫封じになるという民間信仰から、各地でいろいろな形の土笛がつくられ、縁日などで売られました。飯山城では、鳩笛が一点発見されています(33)。型づくりで、色釉が施されています。



燈火具



植木鉢

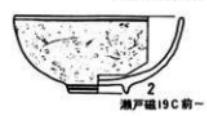


紅皿

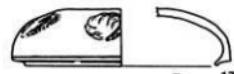
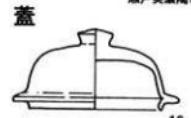
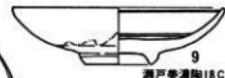
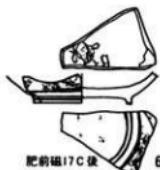
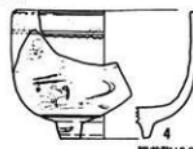


鳩笛

飯碗



茶碗

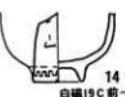


肥前磁19C前~中

瀬戸美濃陶19C前~

瀬戸美濃陶19C前~

茶碗



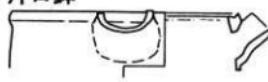
盃



燗徳利



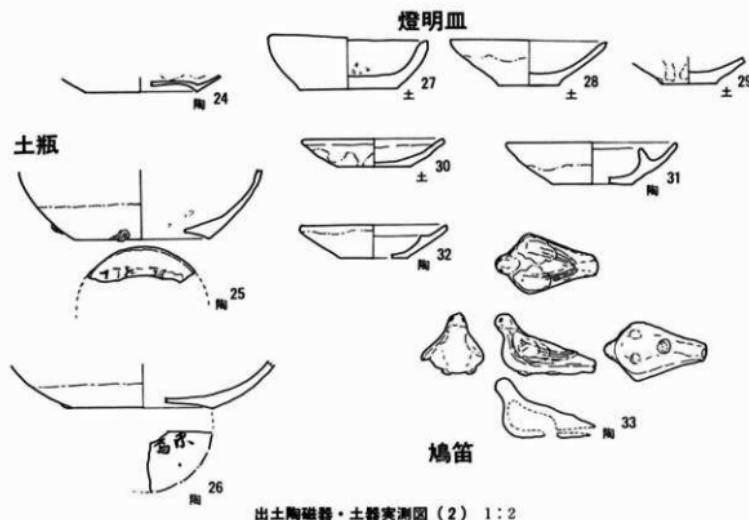
片口鉢



擂鉢



出土陶磁器・土器実測図 (1) 1:2



出土陶磁器・土器実測図（2） 1:2

錢貨

発掘では8枚の寛永通宝が出土しています。このうちの一枚は、背面に「文」の文字がある「文銭」といわれるもので、初鋤年が寛文8年（1668）と分かっています。南中門などから散在して発見されたもので、落としたものと考えられます。



錢 貨

鉄製品・砥石

番所脇より鎌や釘・かすがいなどの鉄製品が発見されました。鎌は木伐用で、番所役人が使用したものかもしれません。釘・かすがいは建物に使われていたものでしょう。砥石は小さなものですですが、大切に使用されたことが伺えます。



鎌

曲物と漆

舞龍部屋付近で見つかった木製の小さな容器の中に漆が付着していました。そのため朽ちなかったのですが、仮壇造りの町飯山にふさわしい遺物といえます。



曲物



砥 石

後世に伝えるために パート1

遺跡の発掘調査は、どんなに慎重に行われても二度と完全復元することはできません。最近の発掘調査は開発事業があってやむを得ず記録保存する場合がほとんどとなっています。そして、発掘が終了すると破壊される運命にあります。それだけに、できる限りのデータを残そうと細心の注意が払われます。



細心の注意を払って振りあげた造構群



細かい作業はすべて手作業で行われる



溝状に掘って土層の様子を探る



土層の違いを識別するには経験がモノをいう



造構の下層からも古い時代の礎石が現れる（番所）



石一点も正確に図面に記録する（南中門）



造構（石列）の標高を機械で読み記録する（番所）

後世に伝えるために パート2

南中門や番所などほぼ明確に現れ、飯山城では初めての遺構が発掘されました。当初より注目され、保存の声も大きくなりました。調査団では保存できた場合を考慮し、発掘された遺構の下面をさらに調査することはせずに、そのままの状態を精密に記録に残そうと努めました。最終的には、南中門が保存されることになり、発見された礎石などは現状のまま永久に残ることになりました。



調査完了全体写真



平板による平面図作成作業



保存協議 貴重な発見により研究者を交えて
保存のための協議を行う



バルーンによる空撮
あらゆる角度から遺構を写真に写す
(表紙写真がその一枚)



市民一般公開 (1992.7.26)



南中門の盛土保存
(発見された遺構を砂で覆う)

南中門の復元展示

発見された南中門跡をそのまま土と砂で覆い、その上に位置寸法を違はず新しい石を配して復元したものです。建物は無くとも、場所とともに南中門の規模が一目でわかります。この事業は市の都市計画課の事業で、市民の皆さんの協力をいただいて実施したものです（平成5年7月）。



1 盛土面を平坦に仕上げる



2 雨落溝を推定復元



3 発掘された砾石の直上に礎石を配置
(建物の範囲を石囲いで表示)



4 表面に芝を張る



5 門入口に石段を設置して完成

※ 岩山城は今年(1994)「築城430年」
の記念すべき年となりました。

飯山市埋蔵文化財調査報告 第35集

—南中門・番所・駕籠部屋跡発掘調査報告書—

発行日 平成6(1994)年2月1日

編集・発行 飯山市・飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山1,110-1

印刷所 有限会社岸田孔版印刷所
飯山市大字常盤5733-1

飯山城年表

西暦	日本年号	城主・城代・支配	事項
-1558頃		泉氏	上杉景城以前は、外様平一帯に住んでいた土豪泉氏の居館であった。 (伝承では鎌倉時代に泉親平が館を築いたといふ)
永禄	泉 弥七郎	城(館)主	「弥七郎は城主のことに戸間、実城(本郭)にもとの如く守り候様に、かたくこれを申しつけへく候」『上杉輝虎書状案』
1564	永禄 7		上杉輝虎の指揮により飯山城の普請完成。
1568	11		武田信玄飯山城を攻めるが、城代桃井義孝らこれを守る。
1578	天正 6		上杉家の相続争いにより飯山地方武田勝頼領となる。(天正10年武田氏滅亡まで)
1582	10	岩井備中守信能	上杉景勝領となり、岩井備中守父子が城代となる。
1583	11		信能、飯山城を普請する。飯山城下町の基礎をつくる。
1598	慶長 3	関長門守一政	上杉景勝会津へ移封により、飯山城は岩井信能から豊臣大名の関一政に引き渡される。水内・高井両郡北都3万石。
1600	5	森右近忠政	森忠政、北信四郡一円支配を家康より命ぜられ、飯山城もその配下となる。
1603	8	皆川山城守広照	森忠政移封。松平上総介輝輝に川中島四郡をあたえる。飯山城には、付庸大名皆川広照が入る。4万石を領す。
1610	15	堀井後守直義	堀直寄、飯山城主となる。4万石を領す。
1616	元和 2	佐久間備前守安政	堀直寄、長岡に移封。佐久間安政飯山城主となる。水内郡に2万石、他国に1万石。
1627	寛永 4	日向守安長	安政没。弟安長繼ぐ。
1632	9	安次	安長没。子安次繼ぐ。
1438	15		安次没。佐久間家繼絶。
1639	16	松平遠江守恵良	松平忠良、遠江掛川から入封。飯山城主となる。4万石を領す。
1645	正保 2		正保の城絵図を作成し幕府へ提出。
~47	~4		大風にて飯山城まわり大破。
1656	明暦 2		松平忠良、大坂城にて没。孫忠良繼ぐ。
1696	元禄 9	遠江守忠藩	飯山城三の丸火災
1706	宝永 3	水井伊豆守宣敬	松平忠良、遠江掛川に移封。水井直敬磨赤穂から移封。飯山城主となる。水内郡2万3千石(他、河内国に1万石)。
1711	正徳元	青山大喜亮幸信	水井直敬武藏若狭に移封。青山幸信抵津尼崎から入り、飯山城主となる。4万8千石を領す。武家屋敷から出火、飯山城内も類焼。
1717	享保 2	本多若翁守助労	青山幸信後北宮津に移封。本多助労越後糸魚川から入り、飯山城主となる。2万石。城下町大火。
1724	9		村替え。実高3万5千石に。
1725	10	豊後守康明	助労、江戸藩邸にて没。康明家督相続。
1730			城下町大火。
1730	15	伊勢守助有	康明没。助有繼ぐ。
1737	元文 2	相模守助盈	助有江戸にて没。助盈繼ぐ。
1773	安永 2		堀浅い。この年の堀改修願いの絵図残る。
1774	3	豊後守助受	助盈江戸にて没。助受繼ぐ。
1798	寛政10		飯山城内火災で西御館を焼失。
1825	文政 8	豊後守助賛	助受江戸にて没。助賢繼ぐ。
1847	弘化 4		善光寺地震により、城内の建物損壊。中門も潰れる。被害状況を幕府へ報告。
1849	嘉永 2		建物再建。
1858	安政 5	相模守助実	助賢没。助実繼ぐ。
1867	慶応 3	豊後守助成	助実隠居。助成相続。大政奉還。
1868	4 (明治元)	豊後守助龍	飯山戦争(浪人の役)で、飯山城をはさんで、旧幕府勢と松代藩勢が対峙。旧幕府勢が城下町に火を放ち、敗走。
1869	明治 2	助竜・助実	助成没。助竜繼ぐ。
1871	4	藩知事	版籍奉還。助竜藩知事に任命されるが、没。助実再勤して知事。
1872	5		廃藩置県。7月飯山藩は飯山県となり、11月長野県に統合。旧藩主、東京へ引っ越し。
1873	6		飯山城取り壇はしまる。
			飯山城二の丸焼失。